

國學院大學學術情報リポジトリ

総合討論の記録(平成二十四年度國學院大學人間開発
学会第四回大会公開シンポジウム：
学生の可能性を引き出す初年次教育)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤井, 益久, 寺本, 貴啓, 藤田, 和也, 上村, 和美, 井下, 千以子, 成田, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001242

〔総合討論の記録〕

登壇者 赤井益久 寺本貴啓 藤田和也 上村和美 井下千以子
司 会 成田信子

成田 それでは、ただ今から五十分間の予定でシンポジウムの各発題を受けての総合討論に入りたいと思います。だいたい長く聞いていましたので、フロアの皆さま、お疲れかと思うのですが、そんなに多い人数ではありませんので、なるべくたくさんの方にご発言いただいて、「学生の可能性を引き出す初年次教育」というテーマにさまざまな角度から切り込んでいきたいと思っています。

最初に、質問や確認、もっと聞いてみたいことをご発言いただきたいと思っています。なお、ご発言の際にはご所属とお名前をおっしゃっていただけますようにお願いいたします。それでは、どうぞどなたからでもご発言、お願いいたします。

■初年次教育の各科目の内容、有機的連関、学生の実態

柴崎 初等教育学科の柴崎と申します。私は理系なのですが。内部の先生はよくいろいろとお話をしているので、上村先生と井下先生にいろいろお話を伺いたいのですが。まず最初に、関西国際大学で、先ほどの教科書を使った授業というのは、ご紹介あった授業でいわゆる「学習技術」という技術の授業で使われていると思うんですが、いわゆるそのほかに初年次教育として、必修科目として、スライドで挙げられた中に、初年次セミ

ナーとか、基礎演習とかサービスマーケティング、リサーチ入門についてはちょっとコメントがあり、「学習技術」はスキルということでよく分かるんですが、「初年次セミナー」、「基礎演習」ではどんなことが、授業のときなされているのかということをお聞きしたいと思います。

それから、井下先生のほうに、桜美林での話で、いわゆる大学での学びにおける選択必修で、一年生だとなんとなく授業の内容とか、一年生の受け止め方も想像できるのですが、そこに三年生とか四年生が入ったときに、一体三年生とか四年生がその授業を受けて、どんなふうに感じているのか。それから教える側からすると、例えば入ってきた一年生と、専門も少しはやっている学年が一緒にいることで、その授業の内容についていうのがどう変化する、どう変わるのかとか、授業を組み立てる立場からすると、一年生だけの場合と、三年生四年生がいるのと、どのような違いが生まれるのかということをお聞きしたいです。

成田 ご質問をもう少しお伺いしたいと思います。

新井 教育開発推進機構の新井でございます。ありがとうございます。ありました。特にゲストの両先生にお伺いしたいのは、今伺っていた初年次教育のキーワードとして、「持続」、高校からの持続という問題、それから「転換」という二つのキーワードがあると私は思ったのですが。やはり、赤井学長の最初の腑分けというのもありましたけれども、一つにはやはり、「持続」、あるいは「転換」といった場合、いわゆるそれまでのものの延長、それから決別、それまでの中等教育からの脱却といえますか。そ

うした部分というのは多分バランスが必要になってくるとは思うのですけれども、そうした部分にどれぐらいのウェイト、例えばおやりになる取り組みの中でのウェイトっていうのをどのようにお考えかなということを一つ伺いたいと思います。

成田 ではもう一人ご質問を伺いたいと思いますが、いかがですが。

加藤 初等教育学科の加藤です。上村先生と井下先生に一つ。それから寺本先生と藤田先生に一つと、二つの質問をさせていただきます。まず、上村先生と井下先生は、初年次教育がうまくいったかどうかの判断は何を基準にしているかというですね。ちょっとあいまいな質問になるかもしれませんが、それが一点ですね。それから、寺本先生、藤田先生には、本学の渋谷の学部の方の先生方、あるいは学生もそうなんですけれども、人間開発の学生を見ると高校四年生だという意見が非常に強いんです。つまり、大学生になりきれていない。多分寺本先生も藤田先生もそう思う節があると思うので、お二人、原因は一体なんなのかということをお聞きつくものがあればお願いしたいという、その二点です。

成田 では、ただ今のお三方の質問に対して、上村先生、井下先生、そして寺本先生、藤田先生の順番で、ご自由にコメントをしていただけますでしょうか。

上村 お三方の先生方、どうもありがとうございました。それ

では順番にお答えさせていただきたいと思いますが。まず、関西国際大学の「初年次セミナー」と「基礎演習」がどういう内容であるかということなんですが、実は「初年次セミナー」というのは今年度からスタートさせました科目です。それまでは、「キャリアプランニング」という名称のものでしたんですが、一年生で入学してまだ適応していない段階で、キャリアもないだろうということで、まず適応のほうを優先順位が高いということになりました。内容としては、それまでのキャリアプランニングでも、キャリア的要素だけではなく、適応支援につながるようなものでした。実は、本学には、高等教育研究開発センターの下にいくつか部門がありまして。その一つが初年次教育部門なんです。その部門で、この初年次セミナーのテキストを開発しております。心理系の教員が部門長を務めていますので、いかに大学に早く適応させるかということで、そのあたりのワークをたくさん入れるような内容のものをやっております。授業の運営は、実際にはアドバイザーという担任制度のようなものがあるのですが、それだけではなく、メンターという制度もありまして、先輩学生が一定の教育を受けた後に、各ゼミに一名から二名つく形で補助をしております。自校教育であったり、適応のプログラムであったり、それから同時期の「学習技術」との連携を図っています。今科目間連携を大学の中でもいろいろと実践しておりますので、「学習技術」の進行と合わせて、それを復習するようなものを「初年次セミナー」の中にも入れて運用しています。

秋の「基礎演習」は、春に一応適応が終わっているということで、今度はそれを展開していきます。ただし「学習技術」で

やれた内容が完全に身に付いてるかどうかと、甚だ疑問なわけですね。繰り返し学ばせるということが大事なので、特にリーディングですね。読みを主体にしながら、スキルを身に付けるような内容を「基礎演習」の中には取り込んでいます。

それから二つ目で、ご質問の中で、持続と転換ということ、すぐく重たい、難しい内容だなと思って伺ってありました。「学習技術」などの場合はやはり、かなりそこにはウエートを置いていまして、大学生になれば学びの姿勢が違ふんだということを十五回かけてかなり、何度も言っていくような形でやっています。私は学生に説明するときに「この授業というのは、パソコンでいうとウインドウズみたいな授業だよ」と言ってるんですね。たとえばパソコンでワードやエクセルを使いますが、それ使ってる基本にはやはり基本ソフトのウインドウズがないと走らないわけです。「学習技術」で学ぶことは、ほかのいろいろな授業の中でも生かしていったほうがいいことを明示的にはつきり言わないと、シラバスには書いてあるんですけども、それを言わないと学生の中では、総合化ができないというのがやはりありますので、この辺りは科目担当の教員にも、何回かに一回は必ずそれを伝えていってくださいたいことをお願いしております。「シラバスに書いてるから分かるでしょ」では、以前の大学教育と変わらないということです、そのあたりをしつかり総合化ができるように、くりかえし言っていくということをしています。

それから、授業が成功したかどうかというのは確かに難しくても、もう少しうまくいったらカリキュラムをまったく変えずに、ずっと来てると思うんです。やはり微調整をしながら来てる

いうことは、完全な状態にはなっていないだろうなと思います。一つは授業アンケートなどを拾えば、ご紹介したようなアンケートの解答が出てくるわけですね。授業が終わった直後ってというのは、非常に、よく学べたと、自分が学んだという実感がありましたら、肯定的な意見が当然出てくるんですけども。しかしそれがそこで終わってしまうと意味がないわけです。それをちゃんとほかの授業に生かしてるかどうかというあたりが大切です。現在本学ではIRを導入しています。例えばGPAであったりとか、それから「卒業研究」ですね。最初のスタートが「学習技術」とすると、一つのゴールが卒業研究になるわけですから、そこまでの変遷っていうのをたどっていく、年間の授業の習得単位数であったりとか、GPAの変遷とかを見ながら、IR的な判断をしながら見ていくということを今始めたところですので、それがうまくいったかどうかというのは今日はちょっとこの場ではまだご説明できないんですけども。そういう総合的な評価が必要であろうと考えております。以上でございます。

井下 三つのご質問が出ました。まず、柴崎先生からのご質問は、三、四年生も含めた場合にどのような効果があるかということでした。例えばアカデミックライティングの指導であれば、四年生に答えさせる。なぜ文献を引用する必要があるのか、ということを経験が説明するのではなくて、四年生に語ってもらう。そして「それはどうしてそうなの？」と教師が問いかけてみる。そうしたやり取りを通して、四年生自身も自分の知識を確認することができずし、四年間を通してそのような形で学

んでいくことができるのだということを、一、二年生にも明確に示すことができるので、一年生に教え込むというスタイルではなくて、学生とのやり取りを通して、学生同士で学ぶことができる。四年生も、もう一度、自分で説明することによって、より理解が深まるという形でおこなうことができます。それから、一、二年生と三、四年生とのキャリアに対する認識の違いも見えてきます。学士課程の四年間に、初年次教育を位置付けて見ていくということにおいては、一年生だけではなく、三、四年生をうまく授業の中に反映させていくという効果があると実感しています。

それから二つ目の新井先生からのご質問。非常に深く難しいご質問なのですが、先ほどの講演の最後に提示しました図1の学士課程カリキュラムのマップを使ってご説明をしたいと思います。

このスライドは先ほども申しましたように、Writing Developmentに関する研究の中から出てきたものです。この背景には、心理学の用語である転移があります。つまり、transforming、学習の成果が転移していくという考えが反映されています。第三象限と第四象限の授業では、知識をそのまま書っていくという知識叙述型ライティング方略 (knowledge-telling strategy) を中心とした指導が行われている。それに対して、第一象限と第二象限の授業では、知識が転移していく知識変換型ライティング方略 (knowledge-transforming strategy) がおこなわれている。知識叙述型ライティングを教えるのであれば、基礎的で定型的な訓練をすることによって、基本的な書く力を効率的に身に付けていくことができます。そ

の力を身に付けた上で、次に知識変換型ライティングによって、知識を発展させていくことができる。つまり、習った基礎的な知識を、自分にとって意味があるように再構造化して書くことができるということですが。また、この学士課程カリキュラム・マップには、授業アメーバというものを示しています。アメーバという生き物は、核があつて自由自在に触手を伸ばしながら身体を動かすことができます。授業も、そのような力動的な存在であると私は考えています。核となる目的があつて、そのときの学生の力量や、そのときの授業内容によって、伸ばしたい触手の方向が異なる。例えば、心理学の実験演習の授業であれば、まずは、実験の手法を学ばせたい。どうデータを分析し、かつ実験レポートを書いていくかを、基礎的、定型的な訓練によって、専門の基礎固めをします。したがって、そうした授業は第四象限に位置します。ですが、その授業で、実験を通して、例えば、ものを見るという奥行き知覚の実験であれば、奥行き知覚の内容から教養教育的な要素も導入してみる。「人間が見る」ということはどういうことなのだろうか。眼球を通してだけものを見るのではない。心を通して、経験を通して私たちはものを見ている。それによって、今の「見えの世界」が構築できているのだというようなことになってくると、高度教養的な内容にも入ってきますし、さらにその知覚の実験を自分の卒論まで高めていくこともできます。様々なライティング指導の可能性が授業にはあると思います。それを授業で各教員がやることによって、学生の力が伸びる。それらの授業が有機的に連関し、多層的に重なることによって、四年間での学びが深まっていくのではないか。ですから、専門基礎科目であっても、専門

教育をしているときもあり、学生が基礎的なことを分かっているならば、基礎に戻るときもあります。一方で、教養教育を充実させるときもあります。専門教育をやりながら、教養的な内容にも踏み込んでいくことも必要です。先ほど、お話ししたように、初年次教育の授業に、キャリア教育も導入し、生涯発達心理学のアイデンティティ・ステータスの考え方を入れていく。そのときには初年次教育から、さらに高度教養教育の内容に入っていくということです。初年次教育としてのコースデザインにとどまらずに、学士課程四年間を通して、定型的な訓練だけではなくて、探究的に学びを深めていくことができます。高校での定型的学習から、初年次教育を経て、だんだんと大学での学びへと転換していく。図1は、そうしたカリキュラムと授業観を表しています。

先ほど、赤井学長先生が「弁別」についてお話しなさいました。初年次教育においても、リメディアル的な内容と教養的な内容を、しっかり教員が弁別していくことが重要であるというご指摘は全くその通りだと私も思います。少なからず、いまの初年次教育ではそれが混同されているところもあるように思います。教員それぞれが、自分の立ち位置、すなわち、自分のディシプリンから、初年次教育や教養教育のあり方を考えていくことが、これからの初年次教育の課題になると思っています。

図1の学士課程カリキュラムにおいて、つながり、まとまり、深まるというのは、授業が連関することによってまとまり、学びが深まっていくことを表しています。

そして、三つ目の加藤先生のご質問。うまくいったかどうかの判断ですが、これは定観測的に見ていく必要があると思っ

ています。例えば、その授業を行った直後に調査をすれば、楽しかったという感想で満足度は高いわけですが、その後、レポートを書かせてみると、学びの質は高いとは言えないというように、評価の仕方や時期、また、量的調査を分析した場合と、レポートを質的に分析した場合によっても違いが出てきます。桜美林でも先ほど上村先生からお話もあったGPAを導入していますし、教員の授業評価もやっておりますので、そういった観点からほかの授業も含めて、また、こうしたFD、SDもこれまでの振り返りとして重要ではないかと思っています。

寺本 はい。先ほどの質問は、高校四年生じゃないかというお話でした。恐らく、「そこまで面倒見るの？」っていうところからきているのではないかと私は思いましたが、その点でお話しします。高校四年生でいいじゃないですか。私たちはルーム制を敷いて、少人数で学生を見ていますね。学生の現状を見て、丁寧に見なければならぬという現状があると思っています。私は学習支援センターの会議に出ますが、履修の仕方から分らないっていう学生もいますし、大学入って戸惑う学生がたくさんいるわけです。そのような問題に対応できる教員がたくさんいることはとてもいいことじゃないかと私は思っています。ここは教員養成系学部です。大学の教員が一つの教師の見本として学生を指導していくこともすごく大切なのではないかかと思っているわけです。人との接し方について、学生が教師になったときにどう思うのかということを大切にしたいなと思っています。

もう少し言わせていただくと、少子化なのか人間関係力が少

し弱いと思っています。ですので、学生同士最初の段階はなかなかお互いに聞くことができないと状況がある。本学部みたいに少人数で初年次の導入基礎演習をやっているということは、お互い交流するいい機会になっていると考えています。

また、学生の特性として物事を分かった感じにはなっているのですが、納得するには時間がかかると思っています。何か物事するときに、納得して自分から動くにはすごく時間がかかっていると思っています。そのため、軽く判断して進んでしまつて失敗する学生もいます。しかし私の感覚としては三年生ぐらゐに急に学生は伸びていると思っています。つまり、出口のころにはかなり成長していると私自身は思っていますので、最初に面倒を見ることがいいのか悪いのかで言えば、私はいいいのではないかと考えています。

加藤 渋谷の学生に「なんでそう思うの？」って聞いたんですね。二つなんです。一つは常に群れているって言うんですね。群れているっていうのは私の判断からすると大人になりきれていない、という点が一つ。もう一つは、社会に対して関心が非常に薄い。つまり、話は彼氏彼女の話、あるいはお笑いの話、芸能界の話。政治経済の話は一切しないということなんで、そういう意味で高校四年生だというわけです。クラス担任制がいい悪いは別なんです。だから、少しうちの学生は三年生四年生になつても大人になりきれていないということですね。将来、教員になつていく学生が多いわけですから、それでは教員としては不適格なんだという判断を僕はして、いうことです。

寺本 私は教員養成学部で私学を出ているんですね。十数人で一緒だったんです。一年生のころはよかったのですが、二年生、三年生になると、メンバーが固まっていることが嫌になる学生が出てきます。学年が上がると少人数グループになつて、ほかの人たちと仲良くなつていきます。ここの学生も先生方おわかりだと思えますけども、学生は「みんな固まつてるよね」とか、言うのです。それはわかります。でも、教員養成系学部で結構特殊というか、教員養成独特の部分があると思っています。そのため、学部としての特性としても見る必要があると思っています。

二つ目の一般知識というか社会に目を向けることに關しては、その通りだと思います。それはまず社会情報に興味を持ってないですよ。その辺はこちらもやらなきゃいけないなと思いました。

藤田 私はほかの学部の学生さんほとんどお付き合いがなく、強いて言うとはんのわずか、「言語と文化」の授業を他学部の学生さんがたまに受けているんですが、時々授業後にミニレポートを書いてもらうんです。それを読んでみますと、先ほど加藤先生がおっしゃった二つ目の関心事については、やっぱり違いはあるのかなとか、学部の学生さんはやや視野が狭いかなという印象は持っています。

むしろ私は、申し訳ないんですが、前任校との比較したお話しかできないんですけども、今四年生のゼミの学生とお付き合いしています。初等の子が四人と健康体育の子が二人の、六人いるんですけど。幼いっていう感じは持っています。とつて

もかわいいんですけど幼いなど。社会的な分別の幼さもさることながら、知的な世界にどういうふうに関心をもつて、自分がそれに向かつていくとか、知的な世界が開かれていくことへの面白さとか、そんなことにどのくらい啓発されているかという点で、幼さというか、未開発というか。こちらがちょっと何か言ったときに、それにどのような反応の仕方をするかとか、食いつき具合みたいなものの違いを感じています。学生たちには知的な世界が開かれていくと面白いなっていう実感を卒論のテーマを通して感じてくれるといいなあといいながら、お付き合いをしているんですけども。その点はやっぱり語彙力も関係しますし、それによる表現の違いも影響しているように思います。ゼミではそれを相互に啓発しあいながらうまく回転していけばいいなと思いつつはいるんですけども、まあちょっと難しいと思いますながら……。

そういう意味での知的な関心をどのようにもっているかというところが教養の程度を表していると思うのですが。一般に教養のある人というと、良質な知識をたくさん持っている人という意味合いで使われますけど、私は、関心をどこに向けて、どの程度の度合いでもっているかということが大事なんじゃないかなと思っています。先ほど加藤先生がおっしゃった、社会や政治・経済でいま起こっていることについての関心の低さを、学生間で感じているというのは、ちょっと考えなきゃいけないなと思いました。そんな部分をどのように啓発していくのかというのを意識しながら、私たちは学生たちと話していく必要があるかなと思っています。

しかし他方で、じつは一般論でいいますと、先ほど寺本先生

がおっしゃったことに関連しますけど、日本の若者の幼さというのは、彼らの社会的な人間関係体験の希薄化というか、その体験のやせ細りやある種の文化状況によって日本全体全体で生み出されていることによる幼さなんですね。だから子どもや若者、あるいは学生さんたちを責めるわけにはいかない問題で、我々大人がそういう社会的な人間関係体験を豊かに用意する社会を作ってきているのかということを問わなければならない。

じつは私は、学校教育でいうと養護教諭の先生方とお付き合いが長いのですが、その方々が八十年代に入ったところからかな、もっとはっきりとは九十年代に入ってからかもしれないんですが、子どもたちが幼いということを盛んに話題にするようになってきました。中学校の養護教諭は、小学生みたいな中学生が多いと言いますし、高校では、まるで中学生のような、というようになったことを覚えています。そんなことが盛んに言われるようになったのが九十年代に入った頃からだったと思います。今の子どもたちがそういう幼さを引きずっているのだとすると、寺本先生がおっしゃったように、幼いなら幼いでいいじゃないかというとおかしいんですけど、そういう子たちとどういう付き合いをしていくのかとか、どういうところを育てていくのかについていうことを課題として考えないといけないのではないかと思います。じつは前の大学でも、大綱化のときに大きなカリキュラム改革をしたのですが、そのときに、これまでは自立した学生を対象にしたカリキュラムを作っていて、自分で選んで自分で卒業していくと。しかし最近では、それができなくなっているから、コースの選択とか履修科目のとり方とかのガイドラインを示してあげる必要があるという話し合いをした覚えがあり

ます。そういう意味では、大学というのは自立した学生を相手にしているというふうに思うと大きな間違いではないかと。私が学生相談室を作った際も、心理相談だけでなく、学修相談のできる窓口も設けて、そこに専任教員を置いて、履修や修論・博論作成についての一般的相談も受けるような体制を作りました。その時に、どこまで面倒をみるかということをめぐるいろいろな話し合いましたが、時代の変化の中で学生たちも変化してくるので、その子たちのニーズに合ったものはどんなものかということを常に考え続けるしかないんじゃないかと思ったのでした。そういう意味では寺本先生がおっしゃっていることも理解できるように思います。

成田 自立や社会的関心をめぐって課題が浮き彫りになってきたかと思います。

今のことに関連しても、またほかの切り口でも結構ですので、質問、意見、取り混ぜて、どうぞご発言ください。

■専門科目とのつながり、足場づくり

原 健康体育学科の原といいます。中では私はちよつと特殊で、初年次教育の導入基礎演習そのものは担当していませんね。担当してる授業としては、むしろ専門の基礎になるような生理とか解剖とかそういう授業を必修の部分で担当してるんですけれども。言われてきてるような、授業の中でどういうやり方をしたらいいかっていうのは、本当にここ三年間ずっと悩み続けてきて、学生たちのアンケートを見ると、言葉はともか

く、こんな授業はなくてもいい、みたいに評価を書いてくる学生もいて、ああショックを受けた、と思っていました。初年次教育っていう意味で特別に取り出した一つのコマではなくて、同時にいろんな授業が動いていく。そういうのはさっき先生方がおっしゃってたように、その中で、一年のときからあっち行ったりこっち行ったりしながら、アメーバは動きだしている。それを気が付いてくれるということを期待しながら授業もやっていると、ころなんですけども。こういう初年次教育っていうのをどこで、どういうふうに考えていくかっていうと、全体で考えていくのが最終的な結論だと思うんですけども。先生方が、例示してくださった授業とほかの科目の中でどんなふうにかかわるのか。上村先生にお伺いします。赤井先生にも専門の授業をやられてたときにそういうことをお感じだったんじゃないかと、ほかの分野という意味で少しお話を伺えたらいいかと思います。

近藤 私は先ほど加藤先生が言われた高校四年生みたいだっていうところに非常に興味があります。実際私は導入基礎演習とかで、非常に丁寧に、手をかけて教えれば確かにできるようなことになるんですけども、果たしてそれが本当にいいのかなって思うことが、やっぱり二年生、三年生を見てるとあるのは事実です。このことっていうのは一つ、上村先生の再履修のクラスと、それから、それをもう一回評価させるっていうような話があったように、その部分とまず関係すると思います。それから井下先生のイニシエーション不在の初年次教育っていうことと非常に関係があると思いますので、何かそのあたりでご意見が

伺えたらお願いします。

新井 先ほどありがとうございます。寺本先生、それから赤井先生に伺いたいんですが。赤井先生の中で、つかけを大学は支払わなければいけない、というお話がありますが、受験の制度保証それから中等教育までの問題というのと、最近一つ板挟みになっている、最近の社会人基礎力という問題。今度はこれは出たあとの上から板挟みになっているという状況です。先ほど寺本先生、それでいいとおっしゃいましたけれども、はっきり言って、手厚くすれば社会人基礎力とか自主性っていうのはどうなっていくのかっていう問題ですね。逆に言うと、社会人基礎力を養うんだったら、すべてほったらかしで、自己責任できちっとやっていくというのが本来なんですけれども、そうしたジレンマを今突きつけられてる中で、先ほどの寺本先生の発言から、今ひとつ一歩進めてご意見を伺いたい。

それから赤井先生の、つけということ、その点に対して大学全体としてどのようにこのジレンマを解決していく必要性和いうのをどのようにお考えかということをお願いしたいと思います。

成田 では赤井先生、寺本先生、そして上村先生、井下先生の順番でご発言いただけますでしょうか。

赤井 まず原先生のご質問から答えたいと思うんですけど。私、リメディアールとイントロダクションとファーストイヤーセミナーを弁別したほうが分かりやすいと申し上げましたけども。それは結果的に、弁別すればいいというわけではなくて、

やがてそれは総合されるものだと思うんですね。個人の学生の中では総合されるものだと。それから弁別してそれぞれの役割をしなければいけないとともに、私はそれぞれが重複するところがあってもいいと思うんです。だから大事なことは何度勉強してもいいと。そういう意味では、専門でやるイントロダクションや、あるいはリメディアールが、例えば初年次の部分をカバーする部分があるといいだろうと思うんですね。ですから、弁別は大学の役割としてしなければいけない。しかし、結果的にそれは学生個人の中では総合されていくものだろうと思います。ご質問と直接かわりがないかもしれませんが、たまたま手元に今、井下先生の最後の四ページのコースデザインからカリキュラムデザイン、さっきお話があったんですが、その一番最後に、アンダーラインが引かれていて、初年次専門教育は、アイデンティティーの発達も視野に入れた「大学のデザイン力」、これは先ほど新井先生のご質問に答えることができる。私はそれを総体的に視野に入れた大学のデザイン力が問われていると思うんです。デザイン力とか制度を設計して具体的な授業形態に落とし込むっていう。それが極めて重要だと思うんですね。

それから、新井先生の、つかけを大学が支払う。社会人基礎力などをどうするかということですが、今までは高等学校までの教育が大学に入ってからでも、どちらかというと円滑に推移していた。それがいろんな問題が起こりだしたところに、この初年次教育ですとか、あるいは大学のそれぞれのツールの役割があると思うんですね。もちろん社会人基礎力だけが大学の求められているニーズではありませんけれども、今先生方が議論

くださった初年次教育を含めての教育というものが、結果的に対人間の総合的な人間力の養成にもなっていくだろうし、生きていく上の活力にもなるだろうし。そういうふうに思います。

私は学生によく言うんですけど、「段取り」っていう言葉をよく使います。演習で発表するにも、あるいは研究会でも。段取りっていうものを。先ほど四名の人間開発の学生がコメントしてくれましたけど、全員がメモやペーパーを持ってましたね。あれは恐らく先生のご指導があったのかもしれないが。まあ何か話さなきゃいけない。何か用意しなきゃいけない。その段取りだと思っんですね。そういうことが一年生のときにでき、二年生のときにできているか。結果的に今言ってる社会人基礎力、つまり対人間のコミュニケーションです。協調性です。一歩踏み出す力です。そういうのが養われると思うんです。ですから、ここを押せばどうなるっていうのはなかなか言いにくいところがあるんですけど、大学は全体としての、井下先生の言うデザイン力を持つ必要があるだろうし。それについては國學院は、今言った初年次教育自体がまだ不十分だと思っていますので、これから全体の大学のデザイン力を深めていかなければならないだろうなと思っています。以上です。

寺本 私の方からは、新井先生のお答えをしたいと思います。まず学生指導を手厚くすれば社会人基礎力はどうなるかという話ですね。そもそもどこまでを社会人基礎力と考えるのかというところがあると思います。また学部・学科によっても、求める社会人基礎力が若干変わるのではないかと思います。さらに、そもそも教員間で統一されているのかということもあり

ますし、その前に明確になっているのかということもあると思うのです。この点を検討すべきであるという前提でお話をします。加藤先生のさっきの話にちよつとつながるところもあるのですが、学生の興味として、教員になりたい学生は非常に多いです。学生の興味としては「いい先生になりたい」「学校に行ってみてみたい」「技能を身に付けたい」「いろいろ知りたい」ということで、学校教育に非常に興味を持っています。つまり、一般社会の方にはそのパワーが向いていないということです。限られたパワーで教師の仕事の興味の割合が大きいのではないかと私は考えています。もう一つの問題としては、単純に「どうしたら上手に授業できるのか」というハウツーに走りがちということなんです。つまり自主的に何かをしたい、自分から行く、というのが少ないと思っています。自主的と言っても、せいぜい自分でボランティアとか行くという行為自体を指すことが多く、その先の自主性がないのです。つまり、ボランティアに行った先で何をするかという自分から「何か」を見つけない、発見したい、というのがないのですね。例えば、「学校ボランティアに行けば何か勉強になるだろう」という幻想を抱いている。「何か勉強になるんじゃないか」と考え、ちよつと出来事があったら、「ああ、勉強になった」という、場当たり的なところがあると述べています。このような現状の中で、私が初年次教育で重要だと思っているのは、なんでも手厚くすればいいわけではないのです。要は「足場づくり」なんです。つまり、どこにあれば、その部分だけを手厚くすればいいという発想なのです。したがって、何でも学生の面倒を見るとは思っていないで、むしろある程度までいけば教師の介入はしないと考えています。

上村 先ほどの議論を伺っていて、「幼い感じ」というのが、実は本学もツインキャンパスになって、教員養成系の尼崎キャンパスの学生と、三木キャンパスの学生とはやはり違うんですね。三木キャンパスの中でも心理系の学生とビジネス系の学生って全く違うんですよ。ですので、「あーなんかいずこも同じなんだな」と思いながら先ほどの議論をちよつと伺っていました。これは感想なんですが、先ほどのご質問の中でいきますと、「学習技術」がほかの科目とどういうふうに関連しているのかというお話だと思うんですが。一つは科目担当者の問題なんです、以前は専門科目を持たない教員が持っていた時代もあるんですが、今はもうあえてシャッフルしてしまっています。専門科目を担当している教員にも持つてもらうようにしているんですね。というのは、卒論を書く時期になって、これは「学習技術」でやってるでしよつていうふうに、やってないことまでやってると思われることも時々あるんですね。ですから、現状を見据えてもらうために、各学科でそういう先生を出してもらうのが一つ。もう一つはあえて新任者に持つてもらうというのもあります。多分、成田先生も来られたとき、いきなり担当してもらうというように、うちの初年次教育の一番基礎になる部分が何かつていうのを知つてもらうというところで、それを知ることによつて教員が自分の授業の中で例えばワークシートを使って授業をしてみましたつていうこともありまふし。あと、本学は今アクティブラーニングを進めているんですけれども、そのアクティブラーニングを進めるにしても、一人の教員がやるだけでは絶対に広がつていかないの、その辺の手法を全員が共有していくような、温度差を埋めていくとい

うところもすごく大事です。手厚くというお話で私がいつも言うときには、初年次教育は自転車の補助輪みたいなものだと考えていて、いつかは外さないといけないものなんです。自転車なのにずっと補助輪で三輪車で走つてたらかつこ悪いですよ。ね。(笑) ですので、やつぱりどこかのタイミングで外すんです。それをいつ外すかつていうのがすごく問題です。春は補助輪付けて走らせてもいいんですけど。早くに外せる子もいるんですね。ですから、それはかなり個人差はあるつていうのが現状として考えています。やはりスパイラル状に上がつていつてもらわれないと困るので、補助輪を外すタイミングで上がつていつてもらわれないといけないです。先ほど再履修の話が出てきましたけど、再履修であつても、スパイラルとしては一段上がるように組んでるんですね。でないと同じことをもう一回やるつていうのはお互い徒労感がものすごくあるので、そういうのが生まれないうに、例えば通常のクラスではやれない、四五〇人が一度に図書館には行けないので。実際に図書館に行つて文献検索を一緒にやつてみるとかですね。ちよつと上がったような感覚を見つてさせて、ほかの授業をちゃんと受けるような方向に持つていくつていうような仕掛けは実は裏ではやつているんです。それが学生にうまくはまると、今までわからなかつたのがわかるようになつていくような進み方をしてくれる子もいます。特に「学習技術」とか初年次教育を担当する教員の意識がすごく大事で、「学習技術」みたいなスキル系の授業つていうのは一番面白くないですよ。面白くないつて教員が思つてやつてしまつと、それはもう必ず学生に伝わるので、必要がない授業をやらされているんだ、みたいになつてしま

ので、そこは担当者だけを集めて、どうやれば面白くなるかっていうところで、そういったことを一種ガス抜きもしながらですよね。「なんでこの科目持たされてるんだろう」っていうような気持ちで、そうじゃなくてご自身の専門科目にもこんなふうに生かれますよみたいなところで、その教員の意識づけを大事にしていかなければ。それがもう学生に伝播すると絶対いいことは起こらないので。逆に本学だと新任者FDをやる際にも、このテキストは必ず、担当しなくても渡すんですね。「こういうことをやってます、見てください」ということで。本学もFDが多いので、年間に五日ぐらいやるんです。そういうところでチューニングをしていくんですね。キャンパスが二つに分かれたので、やはり教員の指向性も変わってきたりするんですが、そこを共通にしていけないといけないので、チューニングをしたりっていうところで、先ほど言ったような、「こんなもの必要じゃないんじゃないか」とか、あるいは「キャリア教育なんて私たち別に研究者でやってきたんだからできないわ」とか、そういう意識では困るんだということを意識づけしていくっていうようなところも、それこそ全学的にやっていかないと、初年次の担当者だけが頑張っただけのものではないなというのは実感しています。以上でございます。

井下 大人になりきれていない。幼いのではないかということ、なことは、生涯発達心理学の中でも青年期の延長ということで、先進国に見られる共通の傾向といわれて久しい、どの国でも見られている傾向だと思います。初年次教育が普及した背景には、大学のユニバーサル化、すなわち、今まで大学に入っ

ない層が大学生になってきたということがあると思います。手厚く、初年次の段階で「鉄は熱いうちに打て」ではないですが、まず、初年次教育をやっておけば大丈夫という考え方があったように思います。でも、それは違うのではないかと、それではうまく二年次につながらないと私は思っています。つまり、初年次というのは時間で区切っているわけです。時間で区切って、そのときにやってしまえばできるということではないと思います。レポートの書き方にしても、初年次で習ったから二年のゼミではできますねとか、一年生の専門科目では書けるようになっていきますねということはないと思います。ディシプリンによって書き方に違いがあるわけですから、いくら一般的な汎用的な書き方を習ったといっても、それが全部当てはまるはずがないわけです。したがって、先ほど赤井学長先生がおっしゃったように、重複があつていいと、私も思っています。重なりがあるからこそ、深まりが出ていくのであつて、つながりがあり、それがまとまりとなつて、深まっていくながら私の学びのとらえ方です。赤井学長先生は「総合」とおっしゃいましたが、私はそれを「統合」ととらえていて、「インテグレーション」していくことによって、その学生は、もしかしたら、大学の間は本当に子どもっぽいかもしれないけれども、仕事に就いてから、何かをきっかけに、大学で学んだことがつなげるときがあるかもしれない。決して、効果というのは、初年次教育を行った直後に現れるのではなくて、もしかしたら、いつか大人になつたときに、あるいは大人になりかけたときに、あるいは大人になりきれない大人のときに出てくるのかもしれないとも思っています。

成田 ありがとうございます。ではあとお一人に伺って、一言ずついただいて、締めたいと思います。

加藤 人間開発の導入基礎演習は僕は非常にうまくいっていると思うんですね。ただ、いつ学生たちの面倒を、手厚くやるのを薄くするかという、その時期の問題だと思うんですね。先ほど出ていた四年生のYさんは僕のルームの子でして、非常に早い時期にもう自分でできるからやりなさいということでも手放して。非常に頑張る子なんです。ひよっとしたら、ほかの学部
の学生は、人間開発は高校四年生だと言うのは別に原因があるんじゃないかと思ってるんです。私は入試制度が一番大きな理由だろうと。つまり学力と意欲の問題で、Yさんは学力があつて意欲がありますから、非常に早く手放せたと。問題は学力もなく意欲もない子をどうするかという。それは今後いろんな大学で大きな問題になっていくかと思えますし、うちの大学でもあるいは人間開発学部でもそういった学生は結構います。それはなんで最近そう思うようになったかと言いますと、四年生の卒論の指導をして、痛切に感じるようになりました、この子たち一体なんだろうなということで、もう十二月の二十日が締め切りですけど、もう寝る時間がないんじゃないかっていって今からヒヤヒヤしている最中です。

成田 それでは、議論は尽きませんが、お一人ずつコメントいただきたいと思います。では、寺本先生から藤田先生、上村先生、井下先生、最後に赤井先生お願いできますでしょうか。

寺本 今日はこのような機会いただきましてありがとうございます。今回アンケートをまとめるといういい機会をいただき、私自身がこれまで考えなかったことを考えるようになりしました。これまでは、私自身シラバス上の部分だけをなぞっていたと正直思いました。一つ思ったのは、学部の先生でさらに共通の理解をするともっと面白くなるだろうなということです。ありがとうございました。

藤田 私は今回つたないながらも実践報告をしたつもりなんです。すが、こういう建設中の学部ですので、いわば皆さんが模索しながらやっている面があるわけですから、それを交流しながらお互いに刺激し合ったり、参考にし合ったりしながら、全体として充実していくのがいいのではないかなと思いました。そんなにお役に立ちにはしなかったでしょうが、ぜひこういう機会を作りながら全体的な水準を上げていくことがとても大事な取り組みではないかと思えます。

もう一つイニシエーションの話が出てきましたが、私は古い形でのイニシエーションは再現してもしょうがないと思うんですけども、やっぱり社会的イニシエーションがほとんど衰退してしまっていて、今日では強いていえば、多くの場合は大学を出て就職したときがイニシエーションになっているわけですね。そこまで引き伸ばされてしまっている。モラトリアムな時期を長く置いていることが果たしてどうなのか、人間的な成長と一人前という自覚をどう促していくのかということをもみんな考えていかなきゃならない問題となっていて、新しい意味で

のイニシエーションというものを、現代の社会にどう用意していくのかということを考えなきゃいけないのかなと思われました。どうもありがとうございました。

上村 本日はいろいろなお話を聞かせていただけてどうもありがとうございました。成田先生がこちらに來られて、そのあとも科研の研究などと一緒にしまして、人間開発学部ってどんなことしてるんですか、などよく科研の集まりのときなどにお話を伺ってたんですけど。今日皆さん方のご議論を聞いていて、「あ、そういうことだったんだな」っていうのを再認識させていただきました。ちょっと一言だけ、先ほどの加藤先生のお話の中で、本学でも実はそういうのがちょっと問題になっています。I Rで分析をすると、私たちが経験的に思っていたのと違った結果が出たことがあります。A O入試で入ってきた子のほうが早期に就職を決めるという傾向です。テストを受けずに入学してきた学生というのはどうなんだろうとか言ってたんですけど、ちょっとやっぱり経験値的なものだけでは言えない部分も実際にあります。やはり、ポテンシャルとモチベーションの二つがそろって、うまく回っていくんですけど。ポテンシャルがない子で、モチベーションがある。それをどうやっていくのかっていうのは、非常に難しい問題で、私たちも今迷っているところなんです。でも、今日いろいろお話を伺っていて、やはり新しい学部ができていくところではすごくエネルギーを感じましたし、先生方のエネルギーも、今日お話を伺った皆さんのエネルギーも非常に感じましたので、成長していくところに少しご一緒させていただいて非常にうれしい気分でございます。

ます。本日はどうもありがとうございました。

井下 先ほどから初年次教育での、「足場作り」という言葉が何回か出てきています。私も最後から2枚目のスライドで、「転換もしていけるよう、大学はその足場作り」と書きました。実は、この「足場作り (scaffolding)」は心理学のチームです。

いわゆる足場作りというのは工事現場の足場作りのことを指しています。足場は作ったら外すんですね。できたところから外していくということ、できたところを見計らって外していくということなので、いつまでも足場はかけておかないということがすごく重要です。そこをどうするか。明日できることは今日のうちに外しておこう。そのぐらいのほうがいいわゆるハードルを高く、そういうことなのではないかと思えます。初年次教育をする側にしろ、受ける側にしろ、ツールやスキルがうまく自動的に動いていけばいいけど、それは形骸(けいがい)化していきます。ですから、教員も学生も悩みながら常に進んでいくことの中に成長があるのではないかと思えます。今日は様々なことを学びました。ありがとうございました。

赤井 上村先生、井下先生、貴重なお話ありがとうございました。昨年は震災で実は卒業式も入学式もしませんでした。しかし、一年飛ばすということは実は大学にとってとても大きいんです。今年卒業式をや、入学式をやったら、学生が本当に喜んでいました。つまり、大学生になる、あるいは大学を卒業するって一つ一つの節目というんでしょうね。それはなんでもない儀式のように見えるんですけども、人間にとって非常に

大きな節目になるんだろうと思います。初年次教育は実は学会ができてからまだ五年でございます。できて五年ですから、まだいろんなことで、先ほど申し上げたように、概念、それから定義も揺れているところがございます。大学にとって一番新しい分野であろうということで。さすがに人間開発学会ということで一番新しいホットなところに注目されました。私から申し上げると実は初年次教育をもう一回見直して、先ほど言ったようにデザインをし直すと。そういう意味で今日は非常に大きな力、エネルギーをいただきました。ありがとうございます。

成田 それでは、ただ今をもちまして公開シンポジウムを終了させていただきます。先生方どうもありがとうございました。